

深掘り！名古屋の偉ZINE伝 vol.1

かくことは生きること！愛すべき筆まめ

こ でら ぎよく ちょう

小寺玉晁

後々われとひとしき好事家の

たすけともなるべきものなりと…

『(天保見聞) 名府太平鑑』より



名古屋なんでも調査団 編



ごあいさつ

このシリーズは、名古屋なんでも調査団^{※1}の団員が書物を通して出会い、大好きになった人たちを紹介する、愛が重めのZINEです。初回で取り上げるのは、愛すべき筆まめ・小寺玉晁（こでらぎよくちょう）！

一般にはあまり知られていないけれど、実はとっても魅力的な人たちが名古屋にはたくさん。彼らにもっとスポットライトを当てたい！表舞台に引っ張り出したい！そんな思いが高じて、いつもの偉人伝^{※2}を大幅にボリュームアップさせたのが本書です。

暑苦しいとは思いますがぜひご一読いただき、あなたもファンになっていただけたら幸いです。

※1 名古屋市図書館の職員で結成された、名古屋のことをトコトン調べる団体。

※2「発見！名古屋の偉人伝」のこと。こちらはA4サイズ1枚にまとまっていてすっきり。

調査団の活動や偉人伝について、詳しくはこちら→



ZINE（ジン）とは

個人やグループが自分たちの興味のあることについて制作した冊子のこと。筆まめな玉晁も150を超えるZINEを執筆しました！

目次



- 小寺玉晁ってこんな人！…………… 3
- 5つのキーワードで読み解く「玉晁のここが好き！」…………… 4
- 玉晁さんに会いに行く～聖地巡礼～…………… 11
- コラム 玉晁自筆本と名古屋市史編纂資料…………… 13
- 特別付録 一口はなし（翻刻）※…………… 25
- 自宅で、図書館で、玉晁に会おう！…………… 26

※特別付録は縦書きのため本文とは逆向きにお読みください。



◆本文中の挿絵について◆

以下の人物の肖像画は山田久氏によるものです。

坪内逍遙

細野要齋 水谷不倒

その他は特に断りがないかぎり、小寺玉晁によるものです。

まずはざっくり

小寺玉晁ってこんな人！

寛政 12 (1800) 年 5 月 18 日、名古屋で生まれました。

生い立ちのはっきりしないようですが、一説には尾張藩の臣下だった人物の庶子ともいわれています。

暮らしは決して裕福ではなかったようですが、名古屋の貸本屋・大惣（だいそう）での筆耕のアルバイト等で生計を立てていました。



名古屋市博物館蔵「小寺玉晁自画像模写」より

好奇心旺盛で、生涯にわたって文化人との交流や、芝居、寄席、見世物などを楽しまました。そうした体験は玉晁自身によって膨大な書物としてまとめられ、現在では、近世後期の名古屋芸能史を知る上で欠かせない資料となっています。

晩年には「なりふりかまわぬ好々爺」だったという玉晁。お酒が好きで、髪はボサボサ、人に接するときはずっとニコニコしていたそうです。

明治 11 (1878) 年 9 月 26 日に数え年 79 歳で亡くなりました。

上の絵は玉晁が描いたものを、彼の遠縁にあたる小寺礼三氏が模写したもの。礼三氏自身も日本画家でした！



5つのキーワードで読み解く 「玉晁のここが好き！」

だから玉晁が好き！というポイント
を5つにしぼって紹介します！

- その1 脅威のメモ魔！
- その2 絵がキュート！
- その3 交友関係が広い！
- その4 人間観察が趣味！
- その5 字のクセが強い！



*引用した文章は読みやすいよう、一部を旧漢字から
現代の表記に直してあります。

5つのキーワードで読み解く「玉晁のここが好き！」

その1 脅威のメモ魔！

- ☑身の周りで起こったことはとにかくメモしている
- ☑しかもそれをちゃんと整理して家で保存（目録まで作成！）
- ☑遺された著作は150種以上！
- ☑中には名古屋で行われた芝居の演目や出し物の記録も
- ☑おかげで当時の名古屋の芸能活動の様子がよくわかる

60年ほど前（文化年間）、広小路の柳の木に大ガエルが繋がれているのを、父に連れられて見たことがあった。まるで生きているようにときどき目をつぶるが、鯉橋村の源蔵さんの作品だということだった。
『玉晁思出随筆』をざっくり現代語訳



代表作は『小説神髓』。
少年時代を名古屋で過ごす。



坪内逍遙

○宝暦貳壬申年

二月、役者入替る。清寿院境内え引越して始る。
三月下旬

仮名手本忠臣蔵

此狂言殊之外、大当りにて、五月晦日限二而休ム。
『尾陽芝居事始続篇』より中略して抜粋

劇、見世物、其他一切の興行物に関する彼れの興味は最も深かつたらしく（…中略…）名古屋の此種の物に関する考証をするには、恐らく**彼れの随筆以上の好資料はあるまい**と思ふ。

『少年時に観た歌舞伎の追憶』より

5つのキーワードで読み解く「玉晁のここが好き！」

その2 絵がキュート！

☑さまざまな師のもとで素読、狂歌、香道など諸芸を身に着けた

☑絵（浮世絵）は森高雅に学ぶ

というようなことは
置いといて、
まずはこのかわいい
絵をご堪能ください！

※p.13でもっと深掘りします



ネット上で見られます！

当館が「なごやコレクション」※にて公開している玉晁の編著作のうち、イラストが載っているのは下記資料です。

- 「一口はなし・大邪政治椀」「人物図会」
- 「勾欄雑集記」「勾欄類見聞」「勾欄類雑集録」
- 「反古袋」「古楽園随筆」「古袖町勾欄記」
- 「拾芥雑秘録」「玉晁思出随筆」「玉晁見聞録」
- 「連城亭随筆」「(天保見聞)名府太平鑑」
- 「(安政丁巳)越獄始末」

※なごやコレクション→詳しくは p.26 へ



5つのキーワードで読み解く「玉晁のここが好き！」

その3 交友関係が広い！

☑ 気の合う人たちとともに「耽古連中（別名八天狗）」「同好会」といったグループを結成、貴重な資料の見せ合いや写し合いをしていた

☑ 明倫堂（尾張藩の学校）の先生だった儒学者・細野要斎（ほそのようさい）とも大の仲良し。その他、さまざまな人たちと身分や立場の違いを超えて交流

メンバーの中には当時尾張城下で**一流の文人**だった人が多数いる。彼は同好会を**非常に誇りに思っていた**にちがいない。そしてそれに加している自分も又、自慢に思っていたであろう。

市川登紀子「尾張城下の一文人－化政・幕末・明治を
生きた小寺玉晁の場合－続」より

（玉晁は）画をかく事がお上手其外、今や昔のはなしやうわさを、見たり聞たりした事のこらず、
（…中略…）書て集て、蔵てござつて、**何を問ても、知らない事ない、御方**
「題小寺玉晁乞兎奇伝」（『感興漫筆 卷十二』）より



細野要斎

玉晁と同様に筆まめ。代表作『感興漫筆』は反古紙の裏を利用して書いた。エコ！

他にも！

玉晁と交流のあった筆まめな尾張藩士

水野正信：藩内外の情報を記した『青窓紀聞』は全204冊！

奥村得義：名古屋城の情報を網羅した『金城温古録』は（養子に引き継がれ）10編64巻！

5つのキーワードで読み解く「玉晁のここが好き！」

その4 人間観察が趣味！

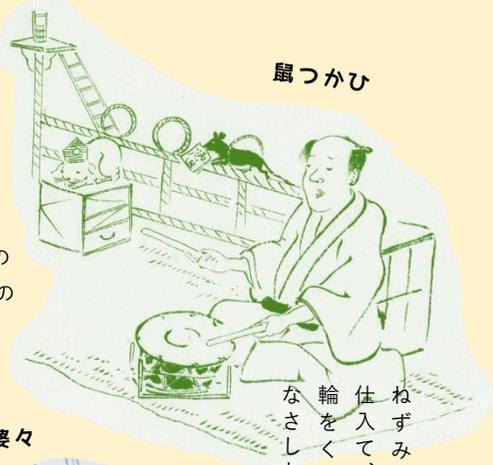
玉晁作の『人物図会』という本があります。今でいう人間観察本のようなもので、玉晁の目に留まった人たちの様子がイラスト入りで紹介されています。登場するのは市井の人、それも定職を持たない人や貧しい人など、ちょっと世間から「はずれた」人たちばかり。ページをめくると玉晁の観察眼の鋭さ、ならぬやわらかさが伝わってきます。

ペコペン座頭



三味線をひきながら、ペコペンと口三味線のはやしをして、人々の笑ひをもよぶさしむ

鼠つかひ



ねずみにさまぐの芸を仕入て、(中略)いくつも輪をくゞりて上り下りをなさしむ

目さらへ婆々



目をさらゆる事に妙を得て、一度掃部頭様勝兵衛 公也に召れし事有

さらう = 掃除する
掃部頭 = 宮中の清掃をする係

玉晁も5~6回さらってもらったことがあるらしい

※翻刻は服部良男氏によるもの(『びぞん』81・82合併号抜刷)を参照

5つのキーワードで読み解く「玉晁のここが好き！」

その5 字のクセが強い！

- ☑ 自筆本の多くは早稲田大学図書館が所蔵しており、ネット上で見ることができる
- ☑ が、名古屋市図書館所蔵の転写本（自筆本から書き写したものの）の方が読みやすい！
- ☑ なぜ早大にあるかという点、同大出身の国文学者・水谷不倒（みずたにふとう）が寄贈したから
- ☑ 水谷不倒のおかげで著作は保存され、玉晁の名も知られるようになった！

名古屋市鶴舞中央図書館には、稿本の転写本が所蔵されているが（…中略…）**玉晁自筆稿本が極めて判読困難箇所が多いなか、この転写本によってわれわれは解読を容易**なものとした。『近代歌舞伎年表 名古屋篇第1巻』より

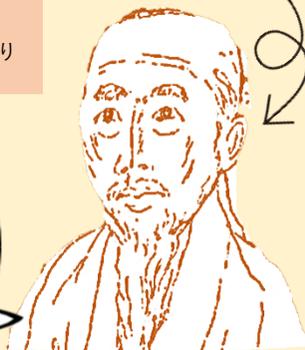
玉晁本には命がこもっている。はずむ思いとねばっこさが共存し、**本人の語り**が聞こえてくるような生き生きした手（筆跡）である。

松本文子氏「中日新聞夕刊2009年4月10日」より

私は小寺玉晁を知り、当時『早稲田文学』に紹介したが、それまでは私ばかりでなく、**玉晁を知る人は余りいなかった**のである。

『明治大正古書価之研究』より

生まれは名古屋。ひとつ年下の坪内逍遙に師事し、いっしょに本を出したことも。



水谷不倒

玉晃自筆版

○平出須益 納屋助、住
名延壽字 修申別号 古今園
才小して若年、醫術を學い
又国学及漢字を空しく
連中の棟梁ともいふし後依見
明下、轉笔病氣を依て長崎町
一丁目津側瑞所ニ暫住す可憐三才
子にて死葬之蓮
無垢菴 釈白瑛居士

○永坂周ニ 上泉町ニ住ス
名徳彰別号一桂堂又龍風
因(狂号龍地座門人也)
丁器ト云秀才之一奇人也
善古物を好みて日々集
一庫ニミツ
及徳三年丁卯十月五日病死
半照遠寺法号
永山院臥雲日深居士

『人物図会』読み比べ

書き写したもの

○平出須益 納屋助、住
名延壽字 修申別号 古今園
才小して若年、醫術を學い
又国学及漢字を空しく
連中の棟梁ともいふし後依見
明下、轉笔病氣を依て長崎町
一丁目津側瑞所ニ暫住す可憐三才
子にて死葬之蓮
無垢菴 釈白瑛居士

○永坂周ニ 上泉町ニ住ス
名徳彰別号一桂堂又龍風
因(狂号龍地座門人也)
丁器ト云秀才之一奇人也
善古物を好みて日々集
一庫ニミツ
及徳三年丁卯十月五日病死
半照遠寺法号
永山院臥雲日深居士

↑チラッと見えているイラストはp.13で紹介します！

玉晁さんに会いに行く～聖地巡礼～

玉晁ゆかりのスポットを巡ってみました。あなたが普段通っているのと同じ道を、玉晁も歩いていたかもしれません！

幼少期に暮らした場所

3歳頃～12、3歳頃、桜の町筋、長島町と桑名町の間に住んでいました。

▲現在は高層ビルが立ち並ぶオフィス街になっています。

大惣（アルバイト先）

江戸時代、日本最大の貸本屋だった大惣。玉晁はここで筆耕などをしながら生計を立てていました。

大須観音 ▶
最も盛大に芝居が行われていた場所のひとつ。境内には大量の鳩が。

大須観音、清寿院、七ツ寺…

名古屋の芝居興行地

この界限では芝居や見世物が盛んでした。玉晁もここに足しげく通い、お芝居を見て感動したり、得体の知れない見世物に驚いたりしたことでしょ。





▶杉村小学校。家の付近と思われます。

あこがれの！持ち家で暮らした場所

正確な場所ははっきりとはわかりませんが、東杉村（現在の北区）に文政中頃から暮らしていたそうです。自分の家が持てたことを玉晁は大喜びし、「けふよりは家持とこそなりひらの東杉なる在郷中将」と詠んでいます。

▶近くの公園にあったシロクマ(?)の像。玉晁が見たら模写していたかも！



長久寺の北裏

親友・細野要斎が住んでいました。お互いの家を行ったり来たりしていたのでしょうか。



◀境内には趣深いお地藏さま。

平和公園（玉晁のお墓）

玉晁のお墓は安浄寺に建てられました。当初は鶴重町（今の錦3丁目）にありましたが、戦後、お寺の移転に伴って、現在は平和公園にあります。



（據奥村定所藏圖）

コラム 玉晁自筆本と

名古屋市史編纂資料 文：山田 久

玉晁は画家の森高雅（もり・こうが/たかまさ）に絵を習ったことがあり、かなり絵がうまいです。（個人的な意見です）下の絵は、当館が所蔵する名古屋市史編纂資料の『人物図会』の冒頭部分です。



自筆本は、現在は早稲田大学図書館に所蔵され、「早稲田大学古典籍データベース」で画像を見ることができます※。市史資料の写本と比べてみると、この自筆本から実に精確に筆写されていることがわかります。構図、着物の模様から人物の表情まで、いったいどのように写したのでしょうか。スキャナもコピー機もない時代、薄い紙を敷いて、薄くなぞって、さらに慎重に描いたのでしょうか。一方、自筆本の絵を観察しますと、線の肥瘦、やわらかい曲線などに生命力を感じさせます。

一つ発見したことがあります。中央の人物は誰でしょうか。自筆本では、背中の「背紋」は、「玉」の字を崩したように読めます。それでこの人物が玉晁であるとわかります。残念ながら市史資料の絵では、形は写していますが、「玉」と判然せず、果たして玉晁と認識して筆写したかどうか、その点で自筆本との比較でわかることがあるように思います。

現代ではデジタル化された画像が居ながらにして見ることができます。そうした環境がなかった時代に、大変な労力を費やして筆写、収集された名古屋市史編纂資料によって、玉晁の絵が伝わったことの意義は、とても大きいのです。

※早稲田の画像はこちら。ぜひ見比べてみてください→



山田 久（やまだ ひさし）

名古屋郷土文化会会員・日本図書館協会認定司書2051号。昭和61年度より名古屋市図書館に勤務し、鶴舞中央図書館では郷土資料のレファレンス業務などを担当。平成22年度より小牧市立図書館に勤務、新中央館の開館準備に従事。現在、岩倉市図書館で会計年度任用職員。

水がよいとて
何か御商売を
へハイ
ふ屋しまする

船頭さん
いつ御出船か
志らぬが
かの賃を
へハイ今
ばんうけ声



小山田庄左衛門
敵討の
前夜
はやり歌を
うたひやし
へエラヤダ
チウく

すすみと
いふ字には
あまり
遍(へ)んか
へにすい

※こちらの特別付録は25ページからお読みください！

猪口でも
 椀でも
 いただい
 多から
 へモウ
 ひらに
 く
 (飛良尔)
 月代なら
 おれが
 すつて
 へ野郎



泉別ハ
 やハリ
 海ばたかて
 へサヨさかい
 ほらそうしの
 まへでハ
 へめつたな事ハ
 いわれぬ

穴をとつて
金を
かりました
へそれは
ぶさタロウ

おそろしい
男が
居るが
熊坂と
やらが子
へソウヨ
長半ダ



もらぬのを
よくく
へトツクリ
と見

外の
魚に
かまはず
早く
へこひく

千歳祭宮の
 きれを
 へチト
 おくれで
 ないか

此の
 ろうそくハ
 早く
 とぼる
 へソうだろ



ばら銭だから
 つなくものを
 へへい
 さし上ます

おまへハ
 まだ
 かみさん
 なしの
 どぶり(道理)で
 勝手が
 へむさい

此のもちハ
大ふく
もちで
へあつたかい
(熱田)

太鼓を
たたくと
音が
志ますが
へどんな人の



主人の
命日に
さかなを
くわしたハ
へくだじや

くらの入口にも
志まり志ました
へ志(じ)やう
(錠)にや



鎌とぎて
 みながら
 ブウブウト
 屁を飛(ひ)り
 へくさ(草)かろう



上戸に
 まんぢうとは
 へ是は
 於(お)かし
 (お菓子)

まだ
 およめ
 入まへ
 なら
 一ツ
 御うけ
 へフツト
 (夫)アリ
 きんちやくが
 きぶんが
 わるいトサ
 へ祢(ね)つ
 希(け)が
 あるう



此手ハ
 一ばんじや
 あるう
 へソウヨ
 せきしや
 公家衆が
 おさへると
 痛(いたみ)が
 直(すぐ)に
 な越りました
 へそりやしやく
 (笏/癩)じや

序文 (たぶん)

一口大明神へ宝鈴一口を釣し御備へ
 十せし一口香を皆食わんとすれどかの
 一口残の教訓を守りて只一口かむ
 鬼一口の難をのがれし如く一口はなしを
 咄して我面●の機嫌上戸猪口など
 酒を一口吞てさかなは何とあたり
 見廻し一口物にほうを焼のいま
 しめを思ひ出して又一口

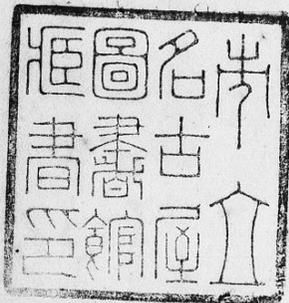
一口大明神へ宝鈴一口を釣し御備へ
 申せし一口香を皆食わんとすれどかの
 一口残の教訓を守りて只一口かむ
 鬼一口の難をのがれし如く一口はなしを
 咄して我面●の機嫌上戸猪口など
 酒を一口吞てさかなは何とあたり
 見廻し一口物にほうを焼のいま
 しめを思ひ出して又一口

《特別付録》 一口はなし（翻刻）

原典：市16-93「(1)一口はなし(2)大邪政事椀」(合綴)より

一口はなし

玉晁流?!ダジャレたっぷり
ことばあそびの本



当館所蔵の玉晁作品を、名古屋なんでも調査団の有志で翻刻（くずし字を活字に直すこと）してみました。※普段、利用者さんからの翻刻依頼を受けているわけではありませんのであしからず。

また、一部内容が不適切かも…と思った部分はふせてあります。お知りになりたい場合は職員におたずねください。

翻刻にあたっては、内外のご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます！

自宅で、図書館で、玉晁に会おう！

名古屋市鶴舞中央図書館では、玉晁の転写本を多数所蔵しており、そのいくつかはサイト「なごやコレクション」を通してご自宅からでも見られるようになっています！



なごやコレクションとは？

名古屋市図書館が所蔵する貴重な郷土資料を、自宅で簡単に検索・閲覧できるデジタルアーカイブです。

※一部、検索ではヒットしない資料や画像が見られない資料があります。

検索窓に「小寺玉晁」または資料名（p.6 参照）を入力すると見られます。図書館内にも閲覧用端末があります。※実物は貴重な資料ですので、基本的にはご覧いただけません。

参考文献 ※本文中で紹介したものは省きました

- 『名古屋市史[第5巻](学芸編)』名古屋市／編 愛知県郷土資料刊行会 1979
『新修名古屋市史 第4巻』新修名古屋市史編集委員会／編集 名古屋市 1999
『明治の名古屋人』名古屋市教育委員会／編 名古屋市教育委員会 1969
『新編愛知県偉人伝』愛知県教育会 愛知県郷土資料刊行会 1972
『名古屋芸能史 前編』尾崎久彌／著 名古屋市教育委員会 1971
『名古屋文學史』川島丈内／著 松本書店 1932
『名古屋叢書三編 第8巻』名古屋市蓬左文庫／編 名古屋市教育委員会 1982
『中京芸能風土記』関山和夫／著 青蛙房 1970
『日本歌謡研究資料集成 第8巻 [近世編]』勉誠社 1978
『おどけの玉晁 恒川了廬をよく知る男』松本文子／[著] [松本文子] [2009]
『尾張城下の一文人 化政・幕末・明治を生きた小寺玉晁の場合』市川登紀子／著
名古屋郷土文化会 1978



釈尊はほとけ
われはおどけの者なれど
同じ年にて
みなさんアバヨ
(玉晁の辞世の句)

企画：柴田わかな

協力：山田 久

執筆：石谷睦美

編集・校正：鶴舞中央図書館奉仕課 2階

令和 8 年 1 月
名古屋なんでも調査団 編
名古屋市鶴舞中央図書館 発行